大阪 歯科
保険医新聞
3/15
2014年第1165号
（毎月5、15、25日発行）
大阪府歯科保険医協会
発行人　志岐　敬
大阪市浪速区幸町1-2-33
電話(06)6568-7731(代表)
http://osk-net.org/
●定価・年間10,000円　月1,000円
●1977年5月23日第三種郵便物認可

東日本大震災３・11特集

「あの日」から３年　被災地を歩く

それでも、前へ

4・5面に特集

午後2時49分――。宮城県東松島市の廃校になった校舎の時計は〝あの時〟から止まったままだった。地震による停電で時を刻むのを止めたのか。その約1時間後に押し寄せた大津波が全てを流してしまった。教室で机に向かうまじめな表情も、校庭を走り回る笑顔も、ここにはなかった。

時計の針は止まっても、時間は過ぎる。東日本大震災から3年を機に、私たちは宮城県の沿岸部を訪れた。復興はどこまで進んだのか。被災者は再出発できたのか。歯科医療は復旧したのか。被災した3人の歯科医師から話を聞き、現地を歩いた。

被災地ではいまだに27万人超が避難生活を余儀なくされ、多くの人が生活を再建できないでいる。それにも関わらず、政府は医療費の窓口免除措置を打ち切り、消費税増税・社会保障改悪を強行。国政の場からは震災復興の話題が消え、被災地を置き去りにした議論が進む。

安倍首相は1月の施政方針演説で、「東北を世界最先端の新しい技術が芽吹く『先駆けの地』にすると声高に語ったが、海岸地域は今も荒野が広がっていた。『先駆けの地』よりも、『生活再建』が第一ではないか」。そんな憤りを抱かずにはいられない。復興の遅れは、誰の目にも明らかだ。

それでも、前へ――。取材から見えてきたのは、そんな被災者の姿だった。未曽有の災害から3年を迎え、明日に向かって歩みを続ける被災地の「今」を見つめた。

（新聞部・伊津進弘、三木正弘、南端理伸）

写真左上から時計回りに、①女川町に今も残る津波で流された4階建てビルと復興事業の看板②廃校になった東松島市の浜市小学校の時計③同市小野駅前応急仮設住宅④同市の沿岸部から石巻湾を臨む⑤同町の仮設診療所で被災歯科医師にインタビュー

歯界

東日本大震災から丸3年を経た。当初はその復旧対策を最優先の国家的課題と誰もが位置付けしたが、その後、原発を再稼動するかどうかの問題や、集団的自衛権の憲法解釈など国の将来に禍根を及ぼしそうな問題が湧き出て、復興はすでに軌道の上を走っているかのように扱われている。

震災は復興から将来の都心部直下型地震や南海トラフの被害予測に視点が移された観がある。震災の教訓を将来に生かすのも大切だが、被災当事者はそれどころでない。震災復興は4年目の今が正念場である。

これからは負債や仕事需要との闘いが加わる。阪神大震災の被災の程度は震源からの距離と家屋の老朽程度によったが、東北の津波は想像を絶する広域でさらに原発事故の人災が加わった。

幸運にも診療体力を震災で失わなかった私は、金融機関への返済プログラムに励まされている。東北の被災者のがんばりを念頭に助手なし、技工も事務もやっている。

お知らせ

協会の社保担当事務局員は、４月中旬まで改定書籍『要点と解説』『歯科保険診療の研究』の製作業務で事務所を離れます。お問い合わせは出先から折り返しの対応となります。